広島大学大学院教育学研究科音楽文化教育学研究紀要 XIX 2007. 3. 25

米国の1920年代における初等教育段階の蓄音機を用いた歌唱教授法

－A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schoolsの分析をとおして－

川 口 さやか
（本講座大学院博士課程後期在学）

はじめに

米国公教育における歌唱教授は、ボストン市の公立学校における唱歌科設立から始まった。19世紀最後の四半世紀には、読譜を中心とする教育が広まった。その後読譜を重視しすぎたことへの反省などから歌を歌うことによる感動体験の追求が広まった。さらに制度的には、1917年に中等学校において、1921年に初等学校において音楽科へと移行した[1)]。Gehrkens（1919）は、1910年代後半の音楽科教育が、暗唱、視唱、音楽理論、音楽史、多くの優れた音楽の聴取、といったさまざまな内容を教授し、知的側面と情意的側面の育成の統合を目ざしたことを記している[2)]。このことから、1910年代後半には歌唱だけでなく、鑑賞や音楽史などへの領域の拡大が実践的に生じていたことが分かる。

1920年代の音楽科教育における指導書には、蓄音機を用いた教授法も記されていた。Dunham, R. L.（1961）は、1897年から1930年までの音楽鑑賞教育について論述している。このなかで、1920年代における蓄音機を用いる初等教育段階の教科書や指導書であることが記されているものは、Fullerton, C. A. の、*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*（1925）（以下 *One Book*）、Giddings, T. P. らの *Music Appreciation in the Schoolroom*（1926）、およびKinscella, H. G. の *Music Appreciation Readers*（1926, 1929）の3点である。*One Book* 以外の教科書や指導書は、鑑賞教育を中心としている。*One Book* だけが蓄音機を用いた歌唱教育を中心としている。Growman, F.（1985）もまた、1900年から1980年までの37点の教科書の分析のなかで *One Book* を扱っている。Mark, L. M. & Gary, C. L.（1992）は、20世紀初頭の教科書の変遷を示すなかで、1920年代の代表的な教科書として、Damrosch, W. D. らの *The Universal School Music Series*（1923）、Giddings, T. P. らの *Music Education Series*（1923）を挙げている。これらの教科書の他に、当時出版の増加傾向があった唱歌集の中で、質の高い教材を備えているものとして、1920年代ではForesman, R. の *The Foresman Book of Songs*（1925-26）と *One Book* を挙げている。*One Book* の序章には、蓄音機を用いた、地方での教育課程の概要を示すことを目的の1つとしたことが記されている[3)]。

筆者はこれまでに、19世紀後期から20世紀初頭にかけての歌唱教材集の分析を行ってきたが、蓄音機を用いた歌唱教授が記されたものは少ない。地方における教育のために計画されているため、主要な教科書としては言及されることは少ないが、質の高い教材を用いて蓄音機を用いた教育課程を示していることが、*One Book* の大きな特徴である。そこで本研究では、*One Book* に用いられている教材や教育課程および教授法の検討を行うことによって、音楽科成立後どのように歌唱教授が計画されていたのかを明らかにする。先行研究では、*One Book* に所収された教材や教育課程および教授法の詳細については検討されていない。

One Book は、1929、1931、1933年に再版されており、1936年には新版が出版されている。このことから、この教科書が広範に用いられたと考えられる。楽曲の作品名の下にはV. R. で始まる番号、又はCol. A. で始まる番号が付されている場合がある。この番号はレコード番号を表していると推察される。この番号が付された楽曲は全238曲中151曲（63%）である。このように、蓄音機を用いた教授が意図された楽曲の比率が非常に高い。本稿では、*One Book* に所収された楽曲を分類し、これらの楽曲が教育課程へどのように組織されているのかを明らかにする。また、教育課程について、学習内容や歌唱試験の実施方法、ステップや視唱のトレーニングの観点から分析を行い、歌唱教授の実践がどのように計画されていたのかを明らかにする。

1　*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools* の構成

1－1　構成

One Book では、Fullerton による章構成は記されていない。しかしその内容から、筆者は表1のような章構成であると考えた。Ⅸ「32週の教育課程」は、第1学年から第6学年までの複式学級で用いるための教育課程が記されている[4)]。

表1　*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools* の構成

Ⅰ	序文（pp. 3-4）
Ⅱ	蓄音機を用いた教授方法（リズムのトレーニング、音楽理論のトレーニング、歌唱教授）（p. 5） 〈フィドル〉の蓄音機を用いた10段階の指導課程（p. 6）
Ⅲ	曲集A（pp. 7-15）国歌や愛唱曲
Ⅳ	曲集B（pp. 16-17）視唱の学習のための曲
Ⅴ	曲集C（pp. 18-35）調の学習のための曲
Ⅵ	曲集D（pp. 36-182、pp. 193-195）多岐にわたる曲
Ⅶ	曲集E（pp. 183-193）歌遊びの曲
Ⅷ	楽典のまとめ（pp. 196-203）、作曲家の生没年、出身地一覧（p. 204）
Ⅸ	32週の教育課程、学年別試験内容、鑑賞の学習のための示唆（pp. 205-220）
Ⅹ	索引（pp. 221-224）

表1のように、Ⅱ「蓄音機を用いた教授方法」や「〈フィドル〉の蓄音機を用いた10段階の指導課程」において、蓄音機を用いた具体的な指導課程を示した後に、楽曲をまとめて配列し、その後楽典のまとめや32週の教育課程などが記されている。全頁数における、教材曲が示されている頁数の占める比率は、約80%であり、その比率が非常に高い。

1－2　〈フィドル〉の10段階の指導課程

表1におけるⅡ「〈フィドル〉の蓄音機を用いた10段階の指導課程」の詳細を表2に示す。

表2　〈フィドル〉（ニ長調、4分の2拍子、8小節）の指導課程

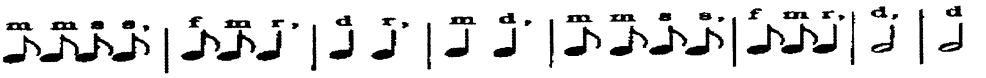
1.（旋律）	澄んだ音と軽快な動きを伴って、暗唱歌のように歌う。
2.（旋律）	“ルー”や“ラー”の音節を用いて旋律を歌う。
3.（階名、旋律）	以下に示すものを記憶するために階名に注意して歌う。 mi mi sol sol, fa mi re, do re, mi do, mi mi sol sol, fa mi re, do, do.
4.（階名、リズム、拍）	階名で歌い、手でリズムを叩く、それぞれの小節の1拍目はアクセントをつけて、他はやさしく叩く。
5.（階名）	子どもたちは、黒板に示された曲の階名の最初の文字だけを書く。 m m s s f m r, d r m d, m m s s f m r, ḋ (〈ママ〉), d.
6.（階名、拍）	以下に示すように、子どもたちは階名で歌う。上に点がついている強勢の箇所では、教師がアクセントをつけてリズムを打つ。 ṁ m s s, ḟ m r, ḋ r, ṁ d, ṁ m s s, ḟ m r, ḋ, ḋ.
7.（小節）	楽曲全体を再び歌い、子どもたちは、それぞれのアクセントの前に垂直な線を階名よりも長く引く。譜表の上もしくは下まで伸ばす。 ṁ m s s, |ḟ m r, |ḋ r, |ṁ d, |ṁ m s s, |ḟ m r, |ḋ, |ḋ.

8.（リズム、音符）　再びリズムを叩き、どの音符が1拍以上の音の長さを取るのかを注意深く観察する。そして以下のように階名の下にアンダーラインを付す。

m m s s , f m r, d r, m d, m m s s ,f m r, d , d .

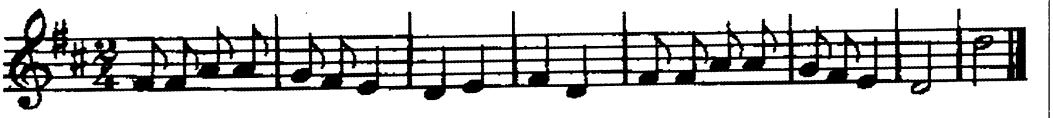
註）1拍に2音が現れる箇所では、2音の下に長いアンダーラインを、1拍に1音の場合は、1音の下に短いアンダーラインを引く。

9.（音符、記譜）　次に、以下に示すように、階名の下もしくは上に対応する音符を書く。



10.（調、記譜）　楽曲を、求められた調に移調する。

例：ニ長調の場合



＊蓄音機は1、3、4、6、7、8に用いることができる。

（Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, p. 6 より作成。表中括弧内は筆者付記。括弧内は、学習内容を示している。）

表2のように暗唱し、ルーやラーの音節で歌い、階名で歌うことによって、十分に旋律に親しんだ後に、リズム、拍、小節、音符および調の学習へと進んでいる。階名唱は3つの段階で行われており、リズム、拍、および旋律の学習と同様に、重視されている。階名を書くことも行われており、小節線や音符なども、単に記号として教授するのではなく、楽曲と関連づけて提示されている。実際にこの10段階の指導課程が毎日の実践のなかでどのように組織されるのかについては、5－2で述べる。

2　楽曲の種類と内容

2－1　楽曲の種類

表1におけるⅢからⅦには、楽曲が配列されている。ⅢをA、ⅣをB、ⅤをC、ⅦをEグループとし、さらにⅥについては、楽曲の内容によってD、F、Gに細分した。以下にその内容を示す。

表3　楽曲の種類

A・・・国歌や愛唱曲
（10曲）　〈アメリカ〉、〈サンタルチア〉など
B・・・視唱の学習のための曲
（6曲）
C・・・調の学習のための曲
（39曲）　〈むすんでひらいて〉、〈よろこびの歌〉など
ハ長調、ト長調、ニ長調、イ長調、ホ長調、ヘ長調、変ロ長調、変ホ長調、変イ長調、計9つの調を示している。
D・・・多岐にわたる曲
（107曲）　子守歌〈Sweet and Low〉、〈ケンタッキーの我が家〉など
E・・・歌遊びのための曲
（13曲）
F・・・テーマの学習のための曲
（29曲）　〈インヴェンション第8番〉、〈交響曲第94番「驚愕」〉など
G・・・民謡
（37曲）　〈メリーさんのひつじ〉、〈菩提樹〉、〈オー・ソレ・ミオ〉、〈アニー・ローリー〉、〈ちょうちょう〉、〈ロンドンデリーの歌〉など

上記のように、国歌や愛唱曲、視唱の学習のための曲、調の学習のための曲など、さまざまな種類の楽曲が収められている。*One Book* では、音程や音階の学習のための課題は示されていないが、B「視唱の学習のための曲」（全6曲）は歌詞とともに階名が記されているため、音程や音階などを学ぶために用いられたと考えられる。

例えば〈Bow-wow-wow〉という楽曲は、*Lyric Music Series* の出典が記されている。筆者が調べたところ、*Lyric Music Series: Primer*（1913）, p. 6 および *Lyric Music Series: First Reader*（1912）, p. 34 に〈Bow-wow-wow〉が所収されていた。*First Reader* では、曲名の下に“音階の旋律”と明記されている。指導書では、この曲が音階の優れたダイアグラムになっていることを指摘し、主音が3回繰り返された後、音階の第5音まで上行し、さらに第8音まで上行した後すぐに、第1音まで下行するという構造をとっていることが記され、跳躍がないことが記されている。このように構造に特徴のある楽曲である。

また、〈The Winds〉という楽曲は、*The Eleanor Smith Music Course, Book One* の出典が示されている。筆者が調べたところ、*The Eleanor Smith Music Course, Book One*, p.29（1908）に〈The Winds〉が所収されていた。指導書では、この楽曲が第2学年の1月と6月に教授されることが記されている。1月には、子どもたちに視唱され、記譜することが記されている。6月には視唱されることが記されている。

さらに〈The Fiddle〉という楽曲は、Bentley の *Song Series* の出典が示されている。筆者が調べたところ、*Song Primer*（1907）に所収されており、指導書ではこの楽曲の学習過程で①1小節を1つに感じること、②ある子どもが旋律を歌い、別の子どもがどこを歌唱しているのかを見つけること、③オクターブに着目すること、④〈The Fiddle〉の次の頁に示された視覚的、聴覚的トレーニングを行うこと、⑤高い音や低い音を歌うことが記されている。

上に挙げた3曲はいずれも、視覚的な学習を重視している点で共通している。〈Bow-wow-wow〉と〈The Winds〉は、期間をおいて再び学習されることが示されている点で共通している。〈Bow-wow-wow〉と〈The Fiddle〉は、楽曲の構造に焦点をあてている点で共通している。32週の教育課程のなかで表2に示した「10段階の指導課程」が用いられるのは、B「視唱の学習のための曲」グループの楽曲のみであった。このことからもBグループが特有の性質をもっていることがうかがえる。

2－2　楽曲の内容

2－1で示したグループのなかから、Fグループの内容を示す。F「テーマの学習のための曲」（29曲）は、旋律を記憶することによって、鑑賞の授業が有効に行えるように意図されたものである。これらの鑑賞曲は短く示されており、学習者が記憶しやすいように配慮されていると考えられる。表4にその詳細を示す。実際の指導過程では、口笛を吹く、ハミングをするなどして繰り返しテーマを学習するように工夫されている。

表4　F「テーマの学習のための曲」における作曲者、作品名、種別

作曲者	作品名	種別
ゴダール	〈ジョスランの子守歌〉	歌劇
シューベルト	交響曲第7番ロ短調「未完成」D759 第1楽章	交響曲
ルビンシュタイン	〈メロディ　ヘ長調〉 Op. 3-1	ピアノ独奏曲
ドヴォルジャーク	「8つのユーモレスク」Op. 101 より第7番　変ト長調	ピアノ独奏曲
モーツァルト	交響曲第40番ト短調　K. 550 第1楽章	交響曲
シューマン	「子どもの情景」Op. 15 より〈トロイメライ〉	ピアノ独奏曲
メンデルスゾーン	「真夏の夜の夢」Op. 61 より〈夜想曲〉	劇中音楽
ヴァーグナー	「ジークフリート牧歌」より〈眠りの動機〉	管弦楽曲
ヴァーグナー	「ラインの黄金」より〈ニーベルンゲンの動機〉	歌劇
ヴァーグナー	「ジークフリート」より〈角笛の動機〉	歌劇
メンデルスゾーン	「無言歌集」Op. 62 より〈春の歌〉	ピアノ独奏曲
ベートーヴェン	〈メヌエット ト長調〉	ピアノ独奏曲
オッフェンバック	「ホフマン物語」より〈舟唄〉	歌劇

フランスの民謡	〈アマリリス〉	歌曲
グリーグ	「ペールギュント」第1組曲 Op.46 より〈山の魔王の宮殿にて〉	管弦楽曲
グリーグ	「ペールギュント」第1組曲より〈オーゼの死〉	管弦楽曲
グリーグ	「ペールギュント」第1組曲より〈朝〉	管弦楽曲
グリーグ	「ペールギュント」第1組曲より〈アニトラの踊り〉	管弦楽曲
ベートーヴェン	ピアノソナタ第8番ハ短調　Op. 13「悲愴」第3楽章	ピアノ独奏曲
マクダウェル	「森のスケッチ」作品51より〈野バラに寄せて〉	ピアノ独奏曲
ハイドン	交響曲第94番ト長調「驚愕」第2楽章　アンダンテ	交響曲
ヴェルディ	「トロヴァトーレ」	歌劇
ビゼー	「カルメン」より〈闘牛士の歌〉	歌劇
ドヴォルジャーク	交響曲第9番ホ短調「新世界より」Op. 95〈ラルゴ〉	交響曲
バッハ	インヴェンション　第8番　ヘ長調　BWV779	ピアノ独奏曲
モーツァルト	ピアノソナタ　変ロ長調　K. 333 第3楽章　ロンド	ピアノ独奏曲
シューベルト	「白鳥の歌」D957より〈セレナード〉	歌曲
ヴァーグナー	「タンホイザー」より〈夕星の歌〉	歌劇
ヘンデル	「メサイア」より〈田園風序曲〉	オラトリオ

(Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, p. 224 より作成)

表4のように、F「テーマの学習のための曲」は、管弦楽曲、ピアノ独奏曲、歌曲、歌劇など、広範囲から選択されている。1914-1915年に出版された教科書である *The Progressive Music Series* の、テーマの学習のための楽曲は、交響曲と歌劇からだけ選択されており、*One Book* の選択は、*The Progressive Music Series* の選択よりも広範である。

3　楽曲の32週の教育課程への組織づけ

3－1　楽曲の種類別の32週の教育課程への組織づけ

次に、それぞれの種類における楽曲が1－1 *One Book* の構成におけるⅨ「32週の教育課程」にどのように組織づけられたのかを、楽曲の種類ごとに示す。同一曲が32週の教育課程に何度も用いられる場合もある。一方、一度も用いられない場合もある。32週の教育課程において用いられる楽曲は、*One Book* に示された238曲中、50曲（21%）であった。そのうち4回以上繰り返し用いられる楽曲は、19曲であった。以下、第1週から第11週を前期、第12週から第21週を中期、第22週から第32週を後期とする。

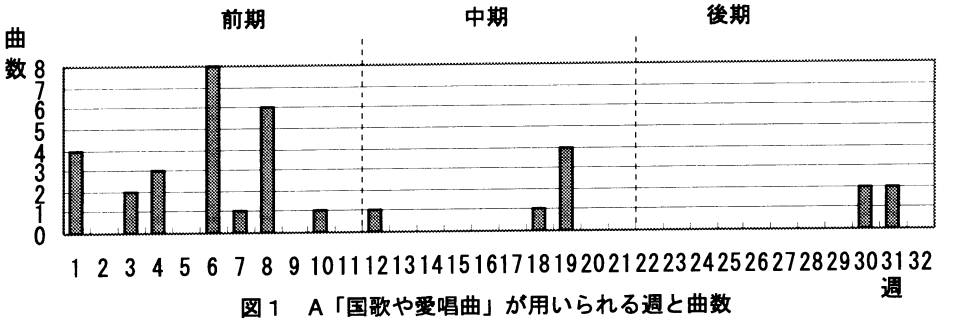


図1　A「国歌や愛唱曲」が用いられる週と曲数

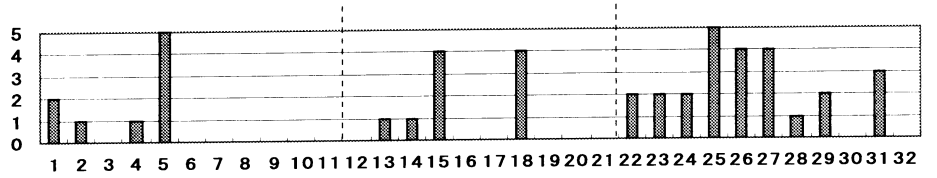


図2　B「視唱の学習のための曲」が用いられる週と曲数

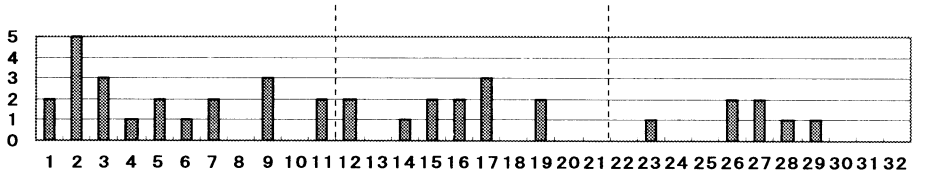


図３　C「調の学習のための曲」が用いられる週と曲数

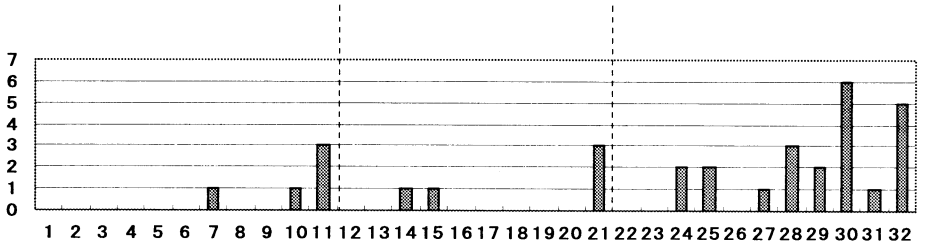


図４　D「多岐にわたる曲」が用いられる週と曲数

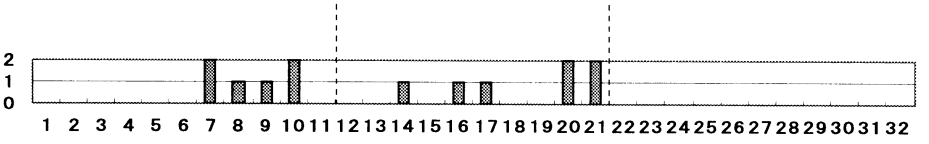


図５　E「歌遊びの曲」が用いられる週と曲数

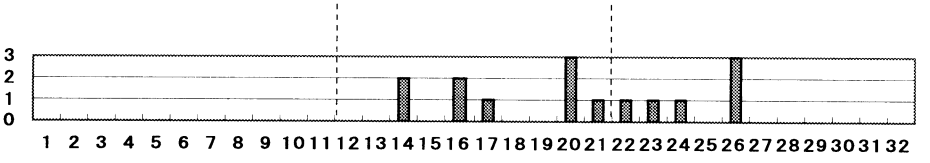


図６　F「テーマの学習のための曲」が用いられる週と曲数

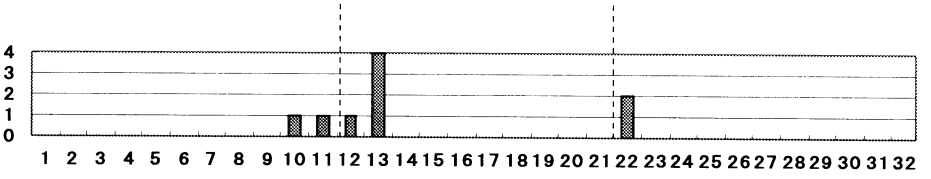


図７　G「民謡」が用いられる週と曲数

図１のように、A「国歌や愛唱曲」は、前期で最も多い。図２のように、B「視唱の学習のための曲」は、前期、中期、後期の３期で表れており、後期で最も多い。図３のように、C「調の学習のための曲」は、前期、中期、後期の３期で表れており、前期でやや多い。図４のように、D「多岐にわたる曲」は、後期になるにつれて用いられる曲数が増加している。図５のように、E「歌遊びの曲」は、前期および中期にのみ配列されている。図６のように、F「テーマの学習のための曲」は中期および後期にのみ配列されている。図７のように、G「民謡」は、前期、後期、中期、３期ともに選択されているが、その曲数は少ない。これらのことから、愛唱曲を導入として、視唱の学習や調の学習は随時行いながら、歌遊び、テーマ、多岐にわたる曲へと徐々に学習内容が移行していくことが考えられる。

３－２　B「視唱の学習のための曲」とC「調の学習のための曲」の系統性

３－１で述べたように、B「視唱の学習のための曲」とC「調の学習のための曲」は、32週の教育課程のなかで、随時学習が行われており、重要な役割を担っている。

32週の教育課程のなかで、Bグループの指導過程はのべ44回表れている。Bグループの指導過程はお

おむね、蓄音機の演奏にあわせて楽曲全体を歌唱する（1-5回）、フレーズごとに部分歌唱する(6-10 回)。リズム、歌詞、階名に着目した学習を行う（11-21回）、「10段階の指導課程」を取り入れながら学習を行う（22-41回）、5線譜に楽曲を記す（42-44回）の順で表れている。このように非常に系統性をもった提示がなされている。用いる拍子は2/4拍子と4/4拍子のみである。楽曲の音域は完全5度もしくは完全8度であり、限定されている。

32週の教育課程のなかで、Cグループの指導過程はのべ40回表れている。Cグループの指導過程はおおむね、蓄音機から流れる楽器の演奏を聴く（1回）、交互唱をする（2-4回）、ハミングする（5-10回）、楽曲全体を歌唱する（11-16回）、フレーズごとに歌唱、もしくは楽曲全体を歌唱する（17-23回）、リズムに着目した学習を行う（24-32回）、フレーズ、歌詞、階名に着目した学習を行う（33-40回）の順で表れている。リズム、歌詞、階名に着目した学習は、Bグループよりも遅く現れている。階名で歌唱することが記されている指導過程は、30回、38回、40回である。30回と38回はハ長調の楽曲、40回はホ長調の楽曲を用いる。1-16回ではニ長調とヘ長調、17-23回ではホ長調、変ホ長調、ト長調、変ロ長調、24-32回は変イ長調とハ長調、33-40回は、ハ長調、ニ長調、ホ長調、ヘ長調が用いられている。このことからは、調号のシャープやフラットの数の少ないものから教授していくのではなく、親しみやすい楽曲から提示し、一定の学習が行われた後に、ハ長調による階名唱を行っていると考えられる。拍子は、1-16回では、2/4拍子のみであり、17-34回では、2/4、3/4、4/4、3/8、4/8、6/8拍子が用いられている。35-40回では、1つを除き、すべて4/4拍子である。C「調の学習のための曲」には、ハ長調の楽曲2曲にのみ、階名が付されている。階名の付された楽曲をC「調の学習のための曲」の指導過程40回のうち後半で用いると同時に、階名の付されていない他の楽曲における階名の学習を行っている。このことから、より発展的な学習が行われていると言え、系統性が見られる。また*One Book*におけるC「調の学習のための曲」は、調ごとに鍵盤図と5線譜上の音高があわせて示されている。C「調の学習のための曲」が用いられる学習過程が示される場合には、4分音符やフラット記号を書くこと、5線譜を書くこと、および楽典のまとめのページに示された長音階のダイアグラムの確認を行うことを伴う場合がある。このようにして、知的側面と情意的側面とが、統合された学びが目ざされている。

4　32週の教育課程における学習内容、および試験内容とその実施方法

4－1　学習内容と試験の割合

32週の教育課程では、毎週金曜日は試験が必ず行われる。*One Book*の序文には、この週末の試験はすべて蓄音機を用いることが記されている。歌唱とテーマ、記譜法と歌唱というように、1日に2つの学習内容を含むものがほとんどであり、まれに3つの学習内容を含む場合がある。試験が行われる金曜日は、後期で1日に1つの内容である場合が多い。各学習内容と試験の比率を図8[5)]に示す。

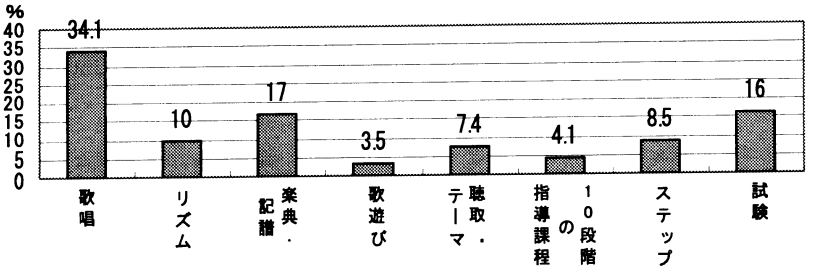


図8　学習内容と試験の割合

図8において学習内容は、歌唱の比率が高く、次いで楽典・記譜、リズムの順で比率が高い。試験は全体の約16%を占めている。リズムの中には、手を叩く、肩を触れる、行進することを含んでいる。ステップの学習は全体の約9 %を占めている。これは聴取・テーマよりも高い比率を占めている。このことから、Fullertonが、ステップを用いた学習を重要なものととらえていたと推察される。ステップの学習については、5－1で詳述する。

4－2　試験内容

試験内容の前期、中期、後期の期間別推移を図9[5)]に示す。

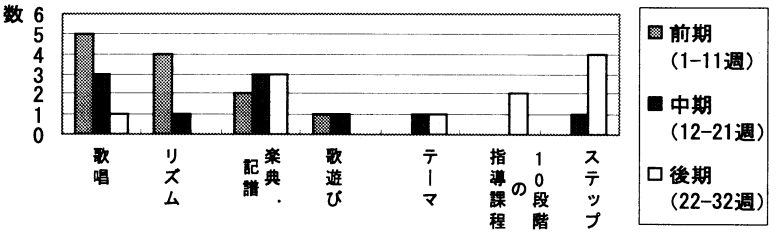


図9　32週の教育課程における試験内容の推移

聴取の試験は行われていないため、項目から除外している。図9のように前期においては、歌唱、リズム、楽典・記譜の試験が多く、中期においては、歌唱、リズムが減少して楽典・記譜が増加し、テーマ、ステップの学習の内容が新たに加えられている。また後期では、ステップの学習が多い。ステップの試験に関しては、以前に学習した2分音符、4分音符などのステップにもとづいて楽曲全体をとおして表現する、といった内容が含まれるために、非常に高度な内容となる。したがって十分に学習を行った後である後期に配列されていると考えられる。

4－3　試験の実施方法

試験は個別もしくは2～4人のグループで行われることが多い。表5にその内訳を示す。

表5　試験の内容と実施方法

試験の内容	個別試験の回数	グループ試験の回数	合計
歌唱	8	1	9
リズム	0	5	5
楽典	1	0	1
記譜	3	4	7
歌遊び	0	2	2
テーマ	2	0	2
10段階の指導課程	2	0	2
ステップ	2	3	5

(Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, pp. 205-215より作成)

表5のように、歌唱、テーマ、10段階の指導課程の試験は、個別試験を重視している。テーマの試験では、ハミングまたは口笛でテーマを演奏することが求められる。また、10段階の指導課程でも6つの段階で、旋律歌唱が求められる。このように、旋律演奏および旋律歌唱を伴うものについて、個別試験が重視されていると考えられる。一方、リズムや歌遊びといった内容には、グループ試験が多い。リズムの試験では、行進する、肩に手を触れるなどの内容が含まれる。この内容はグループで行うことによって、より理解が深まる。したがって、リズムや歌遊びといった身体表現を伴うものについて、グループ試験が重視されていると考えられる。

4－4　歌唱試験の組織

試験では、4－3で述べたように歌唱の個別試験の回数が最も多い。また、4－2で述べたように、前期で歌唱の試験の回数が多い。しかし実施の際は、試験第1回から歌唱の個別試験を行うのではなく、以下に示すような十分な準備段階が確保されている。試験の詳細を示すために、第1回から第7回までの試験内容を表6に示す。いずれの試験も金曜日に実施される。

表６　第１回から第７回までの試験内容

第１回試験	第１週（グループ）（リズム）V. R. 18017 を用いて、両手を上下に滑らせる。
第２回試験	第２週（グループ）（リズム）V. R. 18017 を用いて、手拍子をする、肩に触れるなどする。
第３回試験	第３週（個別）（旋律）〈むすんでひらいて〉V. R. 18622 を用いて、１節のみハミングする。
第４回試験	第４週（グループ）（リズム）V. R. 18017 を用いて、黒板にリズムをアンダーラインで記す。
第５回試験	第５週（個別）（歌唱）V. R. 19831 を用いて、〈フィドル〉を歌う。
第６回試験	第６週（グループ）（リズム）〈兵隊〉の歌にあわせて行進する。V. R. 19831 を用いる。歌は省く。
第７回試験	第７週（個別）（歌唱）V. R. 18330 を用いて、〈唱歌学校〉の楽曲全体を歌唱する。

(Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, pp.205-215 より作成)

上記のように、グループ試験から始まり、個別試験は第３回で現れる。第３回試験では歌詞で歌わず、ハミングが求められている。その後リズムの試験を経て、第５回試験で初めて歌唱の個別試験が行われる。このことは、子どもたちが抵抗なく音楽の試験を受けられるように配慮したためであると考えられる。また、第７回にも歌唱の個別試験が行われる。第３週の課題である〈むすんでひらいて〉は、第２週と第３週で学習した曲であり、第５週の課題である〈フィドル〉は第1、2、4、5週に学習した曲である。第７回の課題である〈唱歌学校〉は、第1、2、4、5、6、7週で学習した曲である。このように、何度も繰り返して長い期間をかけて学んだ内容について試験を行い、子どもたちが自信をもって取り組めるように配慮されている。試験の指導課程についても、緻密な計画がなされている。

５　32週の教育課程におけるトレーニング

ここでは、ステップと視唱のトレーニングを中心に述べる。

５－１　ステップのトレーニング

ステップのトレーニングの組織についてはその指標として、学年別試験内容からステップに関するものを抽出したものを示す。

表７　学年別試験におけるステップの試験

第３学年	V. R. 18017 を用いて、リズムに合わせて４分音符（1拍に1つ）と８分音符（1拍に2つ）のステップを４拍ずつ踏む。
第４学年	リズムに合わせて２分音符（1拍目：ステップを踏む。2拍目：膝を曲げる。）、全音符（1拍目：左足でステップを踏む。2拍目：右足で前方を触れる。3拍目：側面を触れる。4拍目：後方を触れる。）のステップを踏む。その後、右足から始める。
第５学年	V. R. 18665 を用いて〈Swing Song〉のステップを踏む。(Step, bend, step, bend, step, step, step, bend・・・.)
第６学年	|♩♪♪♩♩| のステップを４回踏む。その後、|♩.♪♩♩| のステップを踏む。
第６学年	〈America the Beautiful〉のステップを踏む。右足から始める。(Step, step, change-step, step, step, step, change-step, step, step; step, step, step, step, step, front, side. etc)
第６学年	V.R.18627 を用いて〈Stars of the Summer Night〉のステップを踏む。 (Step, bend, step, step, step, change-step, step, bend, step, bend, step, step, step, change-step, step, bend, step, bend, step, step, step, change-step, step, step, step, change-step, step, step, step,-two-three-four・・・.) *♩= step、𝅗𝅥= Step, bend、𝅝= step,-two-three-four、♩.♪= step, change-step を表わしている。

(Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, p. 219 より作成)

ステップの試験は、音符ごとにステップが定められ、学習が進むと、楽曲全体をステップで表現している。用いられるステップは簡単なものであり、音符によって明白にステップの方法が区別できるものが採用されている。これは円になって、楽曲ごとに手や足の動きを工夫する歌遊びとは異なり、ステップをとおして音符の種類、音符の長さの学習を行い、リズムを体得するものである。子どもたちは、他の曲でも繰り返し同じ規則にもとづいてステップのトレーニングを行う。このことは、リズムのトレーニングを繰り返し行っていると考えられる。

楽典の学習における音符の提示は、全音符から始まり、記譜の学習における音符の提示は、付点2分音符や4分音符から始まる。これに対し、ステップの学習では、4分音符と8分音符を学習した後、2分音符と全音符の学習へと進んでおり、楽典の学習と記譜の学習における音符の提示順序とは異なっている。このことは、ステップの学習では、実際に用いられることの多い音符から学習が始められており、楽曲とステップとの関係が密接であると言える。

5－2　視唱のトレーニング

視唱のトレーニング例としては、32週の教育課程のなかで最も多く用いられている（17回）〈フィドル〉を取り上げる。〈フィドル〉は、表3のB「視唱の学習のための曲」に属している。

表8　〈フィドル〉ニ長調、4分の2拍子、8小節の指導課程

1	第1週	火曜日	（歌唱）蓄音機に合わせて歌う。クラスは、“Hmm”（2、4フレーズ）のみ歌唱する。
2	第1週	木曜日	（歌唱、復習）蓄音機に合わせて歌う。クラスは、“Hmm”（2、4フレーズ）のみ歌唱する。
3	第2週	水曜日	（歌唱）楽器の演奏に合わせて楽曲全体を歌唱する。
4	第4週	水曜日	（歌唱、復習）V. R. に合わせて楽曲全体を歌唱する。
5	第5週	月曜日	（歌唱、復習）楽曲全体を歌唱する。
6	第5週	木曜日	（歌唱、復習）楽曲全体を歌唱する。
7	第5週	金曜日	（第5回試験、個別）蓄音機の演奏にあわせて歌う。
8	第18週	月曜日	（リズム）この曲に合わせて手拍子をする。
9	第18週	月曜日	（歌唱）教科書を開いて、蓄音機を用いて1、3フレーズを歌う。
10	第18週	火曜日	（歌唱、階名）教科書を開いて、階名で楽曲全体を歌う。
11	第18週	木曜日	（歌唱、階名、復習）この曲を復習し、楽曲の最後まで階名に注意する。
12	第23週	火曜日	（10段階の指導課程）1－5段階を行う。
13	第24週	火曜日	（10段階の指導課程）6－10段階を行う。
14	第25週	月曜日	（10段階の指導課程）10段階すべてを行う。
15	第25週	水曜日	（10段階の指導課程、復習）蓄音機を用いて、1、3、4、6、7、8段階を行う。
16	第25週	木曜日	（10段階の指導課程、復習）10段階の指導課程を行う。
17	第25週	金曜日	（第25回試験、個別）蓄音機を用いて、1、3、4、6、7、8段階を行う。

(Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, 1925, pp. 205-215 より作成)

〈フィドル〉には、楽譜にあらかじめ蓄音機もしくは教師が演奏する部分と、クラスが歌唱する部分が示されている。クラスが歌唱する部分は、第2フレーズと第4フレーズであり、それぞれ跳躍が少ない旋律と、オクターブの旋律である。この部分の歌詞はいずれも“Hmm”である。この部分を用いた歌唱が表8における指導課程において最初に現れている。表8のように、〈フィドル〉という楽曲を用いた指導計画は、非常に長い期間をかけて計画されている。そのために、前期（第1週～第11週）、中期（第12週～第21週）、後期（第22週～第32週）での学習内容も異なったものになっている。前期では、この楽曲の一部の歌唱から楽曲全体の歌唱へと順次移行して学習が行われている。中期では、手拍子から階名唱へと順次移行して学習が行われている。後期では、「10段階の指導課程」を用いた学習が行われている。10段階の指導課程は1日につき1段階ずつ行うのではなく、5段階ずつまとめた学習から、10段階すべての学習へ順次移行し、蓄音機を用いて復習が行われている。「10段階の指導課程」では、旋律、リズム、音符、調などの学習が総合的に行われている。ここでは視唱のトレーニングだけでなく、リズム、記譜のトレーニングや、調の学習も行われている。

6　*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools* の特質

本書では、独立した視唱、旋律聴音などのためのエクササイズ課題は含まれていない。楽曲の種類には、A「国歌や愛唱曲」、B「視唱の学習のための曲」、C「調の学習のための曲」、D「多岐にわたる曲」、E「歌遊びの曲」、F「テーマの学習のための曲」、G「民謡」と、さまざまな種類の楽曲が含まれていた。32週の教育課程における楽曲の組織づけは、愛唱曲から、多岐にわたる曲へと進むなかで、歌遊びやテーマの学習のための楽曲が組織されており、B「視唱の学習のための曲」、C「調の学習のための曲」は一貫して位置づけられていた。B、Cグループそれぞれの指導過程の内容には系統性が見られた。また、試験を毎週金曜日に実施し、学習内容の定着を徹底している。試験内容からも、子どもたちに学ばせたい学習内容をもとに系統的に試験が組織されていることが明らかになった。学習内容には、歌唱の内容が含まれる比率が高い。B「視唱の学習のための曲」は、「10段階の指導課程」を効果的に用いることによって、視唱のトレーニングのみならず、記譜、リズムのトレーニングや調の学習にまでおよんでいることが明らかになった。ここでは、系統性が見られると同時に、1つの楽曲でさまざまな学習を構築しているという発展性が見られる。

また、ステップをとおして行われる学習が比較的多く含まれていることも特徴である。これは従来の教科書や同時代の教科書においてはあまり見られないものであり、新しい試みである。ステップの学習は、教育課程における後期や学年別試験の第6学年に多く見られる。このことは、Fullertonが初等教育段階において子どもたちに身につけさせたい学習内容を習得させる手段として、ステップを重視していると考えられる。ステップをとおして行われる学習では身体表現を伴いながらリズムを体得するトレーニングが行われている。ステップの他にも、「手拍子」、「肩を触れる」、および「歌遊びをする」などはいずれも、身体表現を手段としながらリズムを体得するものであった。これらは蓄音機を伴って教授されることによって、より音楽的な教授が可能となっている。さらに、〈フィドル〉の例のように、教師もしくは蓄音機の演奏部分と、子どもが歌唱する部分をあらかじめ示した楽譜を提示し、蓄音機を用いてその指示どおりに楽曲を演奏する教授が示されている。この方法は、従来の教科書や同時代の教科書においては見られないものである。指導方法が楽譜に明示されている点で新しい。

また、F「テーマの学習のための曲」では、交響曲や歌劇だけでなく、ピアノ独奏曲なども配列されており、鑑賞領域における教材の幅を広げて豊かな音楽経験を重視している。その教授は、単に聴取するのではなく、テーマを繰り返しハミングし、口笛を吹くなどして、記憶するほど繰り返し学習するような教授が行われた。これは、内容を絞って学習の定着を徹底していることが分かる。

さらにC「調の学習のための曲」のグループの曲は、楽典や記譜の学習で用いられる鍵盤図とともに提示している。指導過程も歌唱と記譜や楽典の内容があわせて学習される場合がある。このことから子どもたち自らが視覚的にさまざまなことを発見し、学習することが意図されていると考えられる。

以上のように、*One Book* では、より子どもたちの身体運動を伴う学習や、豊かな音楽経験を重視していたことが明らかになった。これらは従来の、教師の一方的な教授から、子どもたちの主体的な学習への転換が見られ、経験主義の兆しが見られる。一方、歌唱教授は、リズムのトレーニングや視唱のトレーニングなどとともに計画されている。学習内容は大きくは変化していないが、教授法に変化が見られた。このことは、1920年代の音楽科教科書である *One Book* は、やや経験主義の方向へ進むものの、従来の教科書のような課題を用いて繰り返し学習する方法を排除せず、形を変化させて残していること言え、経験主義への過渡期に位置していたと考えることができる。

おわりに

以上のように、1920年代における、初等教育段階における蓄音機を用いた歌唱教授を検討するため、*A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools* を分析し、経験主義への過渡期に位置していることが明らかになった。今後はさらに1920年代以降の教科書や指導書を検討し、歌唱教授の変遷がどのように変化していくのかを明らかにしていきたい。

註

1）荒巻治美（2001） p. 7, p. 66
2）Gehrkens, K. W.（1919）p. 16
3）Fullerton, C. A.（1925）pp. 3-4
4）32週の指導課程の学習内容では、すぐ後に記されている、第1学年から第6学年までの学年別試験内容と酷似した内容が記されているため、第1学年から第6学年までの教育課程であると考えられた。
5）「10段階の指導課程」は、さまざまな学習内容を総合しているため、ここでは独立した1項目として表示する。

引用・参考文献

荒巻治美『アメリカ音楽科教育成立史研究』風間書房、2001

Bentley, A. E., *The Song Primer Teacher's Book*, A. S. Barnes & Company, 1914

Damrosch, W. et al, *Universal School Music Series*, Hinds, Hayden & Eldredge, 1923-1930

Dunham, R. L., "Music Appreciation in the Public Schools of the United States 1897-1930", Ph. D. dissertation, University of Michigan, 1961

Foresman, R., *The Foresman Book of Songs* , American Book Company, 1925-1932

Fullerton, C. A., *A One Book Course in Elementary Music and Selected Songs for Schools*, Fullerton and Gray, 1925

Gehrkens, K. W., *An Introduction to School Music Teaching*, C. C. Birchard & Company, 1919

Giddings, T. P. et al., *Music Appreciation in the Schoolroom*, Ginn and Company, 1926

Giddings, T. P. et al., *Music Education Series*, Ginn and Company, 1923-1930

Growman, F., "The Emergence of The Concept of General Music as Reflected in Basal Textbooks : 1900-1980", D. M. A. dissertation, The Catholic University of America, 1985

Johnstone, A. E. & Loomis, H. W., *Lyric Music Series : Primer, First Reader*, Scott, Foresman & Company, 1913, 1912

Kinscella, H. G., *Music Appreciation Readers*, The University Publishing Company, 1928, 1930

Mark, L. M. & Gary, C. L., *A History of American Music Education*, Schirmer Books, 1992

Parker, H. et al., *The Progressive Music Series: Book Two, Book Three*, Silver Burdett and Company, 1914, 1915

Smith, E., *The Eleanor Smith Music Course Manual*, American Book Company, 1909